

2014年10月17日

web受講だからこそ、感じたこと

増田 英明

医療福祉ジャーナリズム分野

凄腕つとめにん ネットのバリア指摘 2万4000個
ゆきさんからの予習資料、今年2月24日付の朝日新聞の記事を読んで、
私は公聡さんにお会いするのをとても楽しみにしていました。
視覚障がいという苦労や困難をどのように乗り越えられてきたのか。
同世代の“つとめにん”として、
物忘れがあり不安を抱えながら一人暮らしをしている母の応援団として、
前向きなヒントをいただきたい。そう思っていました。

ところが、当日の午後になって突然の胃痛・腰痛です。
やむなく大学院に行くことを諦めつつ、思いつきました。
横になってweb授業を受講しよう。
そして、パソコンのモニターを「見ないで」聞いてみよう。
起きているとからだがつらいということもありましたが、
公聡さんと同じように、“視覚以外の感覚”で授業を受けてみようと思いました。

当然ですが、聞くことに集中しました。敢えてメモをとることもしませんでした。
それで分かったこと、感じたこと。
やはり視覚からの情報、映像や画像による情報量は膨大であるということでした。
講師、今回で言えば公聡さんの表情や視線の先、しぐさ、身振り手振りなど
ノンバーバル・コミュニケーションに、普段いかに頼っているかを痛感しました。

一方、視覚を使わない分、いつもとは違う“頭の引き出し”を使っていることを感じました。
加えて、情報の出し入れも、いつもとは違っていました。
見ることと書くことをしない分、“聞く”ではなくて、“聴く”だったのだと思います。
慣れないこともあって、頭に沁みってくる情報はいつもより少なかったかもしれません。
しかし、あれこれ頭に入ってくる情報がなく、情報がコンパクト化したような感覚でした。
五感が少し不自由になることで、かえって情報の取捨選択と整理整頓が進む。
大学院に行けなかったおかげで、いつもと違う感覚を経験することができました。

ひと、そして社会との繋がりを感じる

“そうした不自由さ”に、公聡さんは40年以上も向き合ってこられました。
ある時までは自己否定までもされていたと伺い、胸が締め付けられるようでした。
その時の気持ちにあったのは、孤独だったと思います。
障がいがあるのは自分だけとってしまう気持ち。
誰も自分を振り返ってくれない。自分はいてもいなくても同じ。世の中に必要ないのでは
ないか。
これはまさに、いま、母の口から聞こえてくる言葉そのものです。

公聡さんの心持ちを変えてくれたのは、同じような境遇のお仲間との出会いでした。

「居場所」と「味方」を見つけたと、公聡さんはおっしゃいました。
これに「役割」を加えれば、まさにそれは、認知症の人にとっての大事なことです。
いやそれは、どんなひとにとってもなくてはならないものですね。
人の苦労や大変さを軽くして、心を解きほぐすのはひととの関係性です。
現実の社会で、実際に生きる場面で、
一人ひとりが、社会やひととの関係性を自ら感じていくことが全ての始まりだと思います。
公聡さんがお仲間と出会った時に感じた、一人ではないという実感。
その感覚を、まもなく81歳になる母が、物忘れがある中で感じて欲しい。
そのための場づくりと縁結びをしているのが、いまの私なのかもしれません。

やはり授業が一番！

最後に、大学院に行っていたら公聡さんに質問をしたかったことをひとつだけ。
視覚障がいの人に配慮したウェブサイト構築にあたっての音声ガイドについてです。
イラストや写真、グラフなどに付ける音声ですが、
特にグラフ、折れ線グラフや棒グラフなどについては、
具体的にはどのような音声をつけるのか、質問をしたかったです。

web受講だからこそその初体験はありましたが、
質問ができたり、お蕎麦屋さんに行くことができたり、やはりライブの授業が一番です。